

Title	ダマスクスのフランス研究所よりの寄贈文献
Sub Title	
Author	前嶋, 信次(Maejima, Shinji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1956
Jtitle	史学 Vol.29, No.2 (1956. 8) ,p.101(213)- 106(218)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19560800-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

ダマスクスのフランス

研究所よりの寄贈文献

昨年（一九四四）の夏、ルニアの都ダマスクスにあるハラハバ研究所 Institut Français de Damas から整圖書館において十冊卅の刊行物が寄贈された。一晩母の秋、ペニのカーラム・リヤーフ氏が松本信廣教授を訪ねたのが、「田舎の呪のリキタ・ハリヤーハ Nikita Elisséeff のことだ、西アジア研究の成果がこれららしく出版された。連絡して貰いたいのか」という話があつた。昨年四月返山教授が渡歐された際、ソベヒノ・ルニア・ベンヌホーナなど陸路も海路も陸路も訪ねられた。特にダマスクスのフランス研究所ではその歴史と文化を調査された。特にダマスクスのフランス研究所では、今回の寄贈の多くは交歓から出されたものである。送られた書籍の題目や内容を記す。

1. Ibrahim Keilani: *Abū Hayyān at-Tawhīdī, essayiste arabe du IV^e siècle de l'Hégire.*
2. Nikita Elisséeff: *Thèmes et motifs des mille et une nuits, essai de classification.*

3. Roger le Tourneau: *Damas de 1075 à 1154, traduction annotée d'un fragment de l'Histoire de Damas d'Ibn al-Qalānī.*

4. Mémorial Jean Sauvaget, Tome 1.

5. Abdul-Karim Chéhadé: *Ibn an-Nafīs et la découverte de la circulation pulmonaire.*

6. Henri Laoust: *Le traité de droit public d'Ibn Tai-miya.*

7. Henri Laoust: *Le précis de droit d'Ibn Qudāma.*

8. Khalil Georr: *Les catégories d'Aristote dans leurs versions syro-arabes.*

9. Henri Laoust: *Les gouverneurs de Damas sous les Mamlouks et les premiers Ottomans.*

10. Jean Gaulmier: *La Zubda Kachf al-Mamālik de Khalil az-Zāhirī.*

11. J. Cantineau: *Le dialecte arabe de Palmyre. 2 tomes.*

12. Bulletin d'Etude Orientale. Tome XI—tome XIV (4 tomes).

この母子、アラブ世界の歴史を記した書籍を贈る。たゞ中東の歴史を記した書籍を贈る。

感する。内容についてはまあその一つふたつについて簡略な紹介を試みようと思うが、このようなよい書物をはるばると寄贈してくれたダマスクスのフランス研究所に心から謝意を表することもに、ニキタ・エリセーフ、ヴァシン・エリセーフ、松本、近山の諸教授の御盡力に對しても敬意を表せよう。

まず二番目にあげたエリセーフ教授の著書を見るとその表題は「千夜一夜物語のテーマとモティフ」であり、一九四九年にペイルートで刊行されている。本文11回3頁に「各物語の長短表」が三枚折りみになつてついている。千夜一夜物語中に收められた多數の物語をテーマとモティフによつて分類したものであるが、デンマークのクリステンセン教授が一九二五年にフィンランドのヘルシンキで發表された「モティフとテーマ……民話事典の草案」*A. Christensen: Motif et Thèmes.—Plan d'un dictionnaire de contes populaires. Helsinki, 1925.* によつて研究が、この書を生む要因の一になつたものである。エリセーフ氏は曰く「物語の中にはいくつかの要素を識別することが出来る。まずクリステンセンがモティフとよぶものがその一つで、これはひとつの一つの挿話である。……物語によつてぶくつかのモティフがいろいろの組合せをなすことがある。(例えば魔法使いの話、化身談、漂流談などそれモティフである) 次にそれぞれのモティフのうちに示された根本的の思想……これが第二の要素

で、テーマと呼ばれている。例えばある宿命をもつた子供はどのようにも護つても結局、その運命をまぬがれることは出来ない……などという如きである。第三の要素は敍事詩的從屬物 *accessoire épique* で、大抵は神變不可思議なもの、つまり珍らしい枝のある樹だとか、魔法の杖だとかいうものである。物語りによりモティフとテーマの果す役割は一様でない。ある場合では前者が興味の中心で、テーマは第二義的のものであるか、或は缺けていることがある。冒險の旅、歴史譚などの場合によくそういうことがある。これに反してテーマが主役を演ずる場合が多いのは教訓的物語や寓話に近いものなどにおいてである。」

右のような見地から千夜一夜物語に含まれた多くの物語りのモティフとテーマをアルファベット順に分類し、更に別に「敍事詩的從屬物」をも同じように配列してある。テーマとモティフの篇の「A」の部のうち「戀人 (Amants) 同志または夫婦がひとたび別れて、再會する」という項目には十一種の例があげてある。その一二を引用すると

「カマルツ・ザマーントボドゥールとは強いて引き離されたが再會し、結婚する」

「アリー・シャールとゾモッルドは再會し、結婚する」

「ザインは強いてマスルールとひき離されたが、遂に再會し、結婚する」

という如きで、これら各項目にはそれぞれ三種の番號がつけてある。第三の番號はカルカッタ版のアラビア語原書により、その物語の現れる第……夜目の物語りという夜の番號なのであるが、第一の數字はショーヴァンの「一八一〇年から一八八五年までに歐洲で發行されたアラビア語、及びアラビア人に關する著作目録」V. Chauvin: *Bibliographie des ouvrages arabes ou relatifs aux Arabes publiés dans l'Europe Chrétienne de 1810 à 1885. Liège, 1900.* 中に示された各物語りの番號であり、第一の數字は、H. ハヤーフ氏自身がつけてこの書に入れたコンコルダンスの中の番號である。

ではこのコンコルダンスはどのような構成であろうか。すでに一八九六年にフランスのバッセ K. Basset が、カイロ、ポンペイ、ブレスラウ、ペイルートなどの各アラビア原語版の項目索引をつくり、更に一八九八年にはローン、ガラン、ハビヒト、ワイルなどの英譯や獨譯本の項目索引を發表した。これらはすべてシヤハラザードの物語る第何夜かその數を示したものだが、前述のショーヴァンはそれぞれの物語の出てくる各書の頁數を示していく。エリセーフ氏のコンコルダンスは、もつと精密なもので、ショーヴァンの書目、カルカッタ第一原語版、ガランのフランス語本などを見はじめ De Hammer の佛譯本、ブーラークの原語版、レンの英譯本、カルカッタの第二原語版、バートン版、リットマン

獨譯本、ペイルートの原語版、ブレスラウ原語版、マルドリュスの佛譯本その他すべてで十四種のテキストから、欲する所の話をすぐ探し出せるようにしたもので、著者として多大の労力を費したものと思われ、研究者にとって實に便利なものである。また卷頭に「千夜一夜物語の起源」「その骨組み」「物語の特質分類」「各地に藏せられる主要な稿本」「各種の譯本」などの研究を納めているが、千夜一夜物語の概説として、あわめて明晰な知識をあたえるものである。また卷末の附錄はマスティーヴの「黄金の牧場」、アン・ナディームの「目録書」アル・マクリーズィーのキターブル・ヒタットなどに現われた千夜一夜物語の成立の由來を示すアラビア語記録を抜萃したものである。

そのあと折込み圖表は前文にも一言した各物語りの長短を圖示したもので、カルカッタ版を基とし、一夜を一センチづつにして、各物語りの長さの大體が一日のもとにわかるようにしてある。また最後に引用書目と索引とがついている。一九四九年四月二十一日にダマスクスで書いた著者の序文には、「わたくしはここに民間傳承研究者の研究の一助となり得るような仕事を提出しつゝ、千夜一夜物語研究に貢献をもたらしたいと思う。……千夜一夜物語は様々の植物の亂れしげつた廣漠たる草原に似てはいいであろうか。…この上なく美しい花が惡草ととなりあい、いとも妙な芳香が、えぐい惡臭と入りまじるかの草原に。」といふ

節が見える。かぐわしく可憐な名花も、雑草醜草も雜然としてそのまま包擁した民間説話の大草原であるが故に、千夜一夜物語は至るところであらゆる人々に親まれていくのである。この中に赤裸々な中世西アジアの社會が描かれているかと思うと、鹽からい人生の一ときをやわらかいヴェールでつつんではのぼると樂しくしてくれる夢の世界もある。現實から夢の世界へ、縁したたるオアシスから熱風すさぶ黃色い沙漠へと自由自在にひきまわす不思議な物語りである。本書はフランス科學界のもつともすぐれた頭腦の持主の一人たる著者がうちたてた、この摩訶不可思議世界にわけ入る道標といえるであろう。卷末の引用書目でもわかる如くアラビア夜話の研究はかなり多數出ているのであるが、まだこの書ほど完備したものはなかつた。最後に本書は一九四五一年二十七日の夜ライン上流の戰闘で斃れた著者の親友フランソア・ドニー氏 François Deny に獻げてあることを附記しよう。

× × × ×

次に第三にあげたル・トゥールノーの「一〇七五年から一一五四年までのダマスクス」をとりあげよう。一九五二年ダマスクスの刊行で三七五頁、卷末に折たたみ式の地圖が二枚（第一はメソポタミアとエウフラテス上流地域、第二はシリアとペレスティナ）ついている。著者はかつて故ジャン・ソーヴィージュ Jean Sauvaget 教授に師事し、現在はアルジエ一大學の教職にあるひと

である。

第一十字軍は一〇九六年にはじまり、同九九年の七月なかばにエルサレムを占領した。一一四七年には第二十字軍が出發したがイスラム教徒側の反撃の氣運もようやく熟し、サラディン（サラーフ・ディーン）がエルサレムを回復して、敗殘の十字軍士を海岸地帶に追つたのは一一八七年の盛夏であった。この悲報に奮い立つた歐洲諸國は大じかけな第三十字軍を組織したことはよく知られている。丁度、第一、第二十字軍のころ、シリアの古都ダマスクスにハムザ・ビン・アサッド・イブヌル・カラーニー Hamza b. Asad ibn'ul-Qalānisi という學者がいた。一一〇五年九月に生れ、バグダードのニザーミーヤ學院をはじめイランの主な町々で學び、故郷ダマスクスに歸つてからはアン・ヌーリーヤ學院の神學教授たるかたわら、民軍の司令官を二回もつとめた後に一六〇年三月（一説に一一七六年一月）に歿した。その葬儀にはサラディンも參列したという說もある。この人の主著の第一は「タリーフ・ディマシク」*Tarikh Dimashq* すなわち「ダマスクス史」であるが、丁度、十字軍の活動時代に相當の要職におり親しく見聞したところを刻明に記録にとどめたというところからすこぶる珍重された。その記述は九三七年から一一六〇年ころまでに及んでいる。十字軍時代のイスラム教徒側の記録としてはシリア貴族の出身で詩文の才にめぐまれ、また果敢な戰士として

しは十字軍と戦つたウサーマ・イブン・ムンキズ Usāmah ibn Munqidh(一〇九五—一八八)の自序傳 Kitāb al-Itibār といふ最も有名なものである。かなり大部のものだ。われらのひとアラビア語でしるしがあるが、十字軍に関する記録が多いために早くから歐洲の學者たちに注目され、一九〇八年にはアーネル H. F. Amedroz の校訂した原文がライデンで刊行され、一九三一年には英國のギップ氏の訳本が「十字軍についてのダマスクス年代記」H. A. R. Gibb: *The Damascus Chronicle of the Crusades, extracted and translated from the Chronicle of Ibn al-Qalānīs*, London 1932 と題して刊行された。ギップ氏の十字軍史 R. Grousset: *Histoire des Croisades et du royaume franc de Jérusalem*, 3 vols., paris 1934 をはじめ多くの書がこの英譯本を利用している。

ギップ氏の書は、貴重なイブヌル・カラーニーの年代記中かへゆつぱる第一十字軍の來襲やその經營、ならびに初期には互に憎みあい疑い合い、また相戦つていたイスラム教徒が、共同の敵を前に、よつやく相提携し果敢なレシスタンスの力を盛りあげてゆくところなど抜き出して譯出したもので、残りの部分はあげて割り去つたのである。

ル・トゥールノー氏の本書は、やはりイブヌル・カラーニー

のダマスクス史の抜粹譯ではあるが、ギップ氏のとはよほどちがつた見地からしたもので、その點でこの書の特色をはつきり出している。ル・トゥールノー氏の説によると十字軍の侵入はイブヌル・カラーニーが重視したところではあるが、それを第一義的に見ていたわけではなく、彼の關心は主としてダマスクス市にそがれ、またこの方面的根本史料を駆使しうる地位にもいた。それは、その後半生の四・五十年間を同市における重要な地位を占めていたせいであるという。ル・トゥールノー氏は特にセルチック・トルコがダマスクスに進出してきた一〇七五年からブルー朝をみて、ザンギー朝のヌール・ツ・ディーンがこの町を支配するに至つた一一五四年までを選み、その間の重要箇所を譯出している。ではこの期間のダマスクスをえがいたイブヌル・カラーニーの書にはどの點が最も光彩を發つてゐるだろうか。

まず都會生活については、希望を満すほどに豊富な記録は見出しえないといふ。宗教生活の面や、建築活動の面でも比較的平凡である。經濟的活動の面はすつと興味を増してはいるが、まだまだ不完全である。工業方面は何の記録もなく、商業についても極めて少しだ。ただ十字軍のために水陸の交通を妨害されて不由することなどは記されている。イブヌル・カラーニーの最も關心をよせているのは、ダマスクスの市民のためにどうして物資の補給を確保して行つたかと云う點で、この方面についての記録

はよほど豊富であるし、ことに歴代當局者の土地・食糧政策などについて詳しい記録をとどめているという。

最も多くの分量を占めているのはこの町の政治的記録である。トルコ系支配者をめぐつて、シフナ、ワジール、ハージブ、ライス、サルラール、イフファハサルラール、アミールなどという文武の官名を帶びた多くの高官がいた。これらが果してどのような機能を果していたかは、なお研究の餘地を多く残しているが、この記録などその究明に最も有力な資料としなければならぬものであろう。その他、民軍の活動、バーティニヤ（アッサシン……イスマーリール派）の暗殺活動などについてもかなり興味深い記載がある。「なるほどイブヌル・カラーニシーは當時のいろいろの出来ごとに密接な交渉をもつてそれらを傳えていることは賞讃の價値がある。…彼は民衆の運動と暴力を憎む貴族階級の一人であり、何よりも西歐人を敵として見る敬虔なイスラム教徒でもあつた。しかしまたそれとともに正確さを期そうとつとめ、概して自分等の反動作用を自制し得るところの歴史家でもあつたのである。彼の著作の良所は必ずしも單に好い地位におかれていたがためのみではなく、かれが諸事件の聰明・透徹な目撃者であつたことを自ら示しているためである」と著者は序文中で述べている。またこの譯業にあたつてはアメードロスやギップがつかつたテキストよ

りもよほど正確な稿本をマイクロフィルムによつて利用し得たことである。

世界でも最も古い都市の一つといわれる名邑ダマスクスもイブヌル・カラーニシーの史書を得て一しお精彩を添えた感がある。中世の西アジアの曲型的都市の生きかたがこの一巻にこまごまと寫し出されていて、そのころの人々の悩み苦しみを如實に傳えているのである。この一巻はギップの名著を補うところが多く、ギップの書はまたこの書をますます映發させるであろう。またこの書は今は亡きジャン・ソーサー教授に獻げてあるが、この仕事を果すよう著者にすすめたのもまた同じ人だつたと序文の一節にしるしてある。

—前嶋信次—

河内屋可正舊記
(野村 豊編)

河内國石川郡大ヶ塚村（現大阪府南河内郡石川村大字大ヶ塚）の庄屋河内屋五兵衛可正が隠居の後、元祿寶永年間約二十年に記述した二十余卷中、殘存の十五卷四綴を近畿大學講師野村豊氏が解説を加え、見出しを附して印行した貴重な近世庶民史料で（菊版形約四百頁）可正の著作の目的は善念寺（現顯證寺）の寺内町より發展の同村民自他の子孫のために廢惡、修善、修身、齋家を